ロシアの作家とチェチェン

── A・S・プーシキンの故郷と異境 ──

藤沼　貴

この紀要で数回繰り返し述べたように，私はロシア作家とチェチェンの関係をテーマとした著作を計画している。そして，その一部分の基礎となる小論をすでに4回，本紀要に発表した。[1] 今回の小文はプーシキンとチェチェンやカフカース，さらには異文化とのかかわりに触れたものだが，すでに発表したものと同じく，この小文も将来の著作の一部となるはずのものである。また，今回もこれまでと同様，少数の資料をもとに短期間で書かれた素描にすぎない上に，内容の性質上「論文」より，むしろ「語り」に近いものだが，将来の著作の担保として，あえて公表することにした。

1　プーシキンの血筋

この小論の枠内でくわしく見ることは到底できないが，19世紀ロシアにとって，「他者」の問題は実生活の面でも，社会面でも，精神文化の面でも，もっとも重要な問題の一つだった。文学でも，自己の発見と構築に費やされた18世紀と違って，19世紀では，他者の問題が自分の中の他者，自分の文化の内部の他者，そして，もちろん異文化の中の他者を含めて，最重要な問題の一つだった。しかも，その重要度はロシアにとっては，他のヨーロッパ諸

国や日本に比べてはるかに大きい。この問題の解明なしに，19世紀ロシア文学ばかりでなく，ロシアの文化パターンの特質を明らかにすることは不可能と言って過言でない。

ロシアにとっての他者の問題の中で，カフカースは重要な一角を占めているが，この問題にもっとも早く取り組んだのは，すでに同時代人によって認められていたように，1821年に『カフカースの捕虜』を書き上げたプーシキンにほかならない。1843年ベリンスキーは，作者プーシキンがこの作品で「壮大なカフカースの容姿を創造し」,「ロシア社会は初めてカフカースを知った」[2]と述べている。

私がこの紀要に掲載した小論ですでに取り上げたグリボエードフは1818年外務官僚になると，まもなくペルシャのロシア公使館勤務を命じられ，カフカースを経由してテヘランに赴任し，カフカースとペルシャの間を往復しながら，外交官として活躍した。途中短期間だけロシアに戻ったことがあるが，1829年テヘランで地元民によるロシア公使館襲撃に遭って不慮の死を遂げるまで，11年余の勤務生活のほとんどすべてをペルシャとグルジアで過ごした。かれは当時のロシア切ってのカフカース・ペルシャ通で，1828年，死の直前にグルジア女性と結婚したほどだった。また，かれは『グルジアの夜』と題する悲劇を書こうとしていた（あるいは，書き始めた)。しかし，今残っているその悲劇は数ページの断片に過ぎない。また，その代表作『知恵の悲しみ』は直接カフカースにはかかわっていない。つまり，残念なことに，かれの深く長い貴重なカフカース体験は言葉によっては，まして，文学作品としては，表現されていないのである。

やはり私がこの紀要で取り上げたベストゥージェフ=マルリンスキーはカフカースに題材をとった小説，紀行をたくさん書いたが，かれが軍人としてカフカースに赴任したのは1829年，カフカース関連の作品を書いたのはそれ以後のことだった。そのほかに，プーシキン自身が『カフカースの捕虜』

の後注で紹介しているように，デルジャーヴィン，ジュコフスキーなど，かれ以前の作家の作品にもカフカースの描写が見られるが，それはカフカースに対する特別の関心を示すものではない。[3] というわけで，文学作品の中でカフカースと正面から向き合ったのは，プーシキンが最初だった。

プーシキンがカフカースに直接対面したのは，かれが 1820 年にそこへ追放されたという外面的な事情によるものだが，かれはその異境を敏感に，深く感じとり，その生活，文化，そこに生きる人々，その人たちと外来者ロシア人との関わりを観察・考察し，人に伝えるばかりでなく，異境体験を自分の内面に取り込んで，精神形成と詩情充実の要素にした。それをみごとに成し遂げることができたのは，かれの非凡な詩的鋭敏さや精神的柔軟さにもよるのだろうが，それ以外に，かれ自身の中に本来的に存在した「異邦人体験」と言うべきものが作用していたと思われる。

よく知られているように，プーシキンの中にはアフリカ人の血が入っていた。かれの母方の曽祖父アブラーム・ペトローヴィチ・ハンニバル（ロシア語の発音では，ガンニバル）（1697－1781）はアビシニア（現エチオピア）の領主である公家の生まれで，幼いときに人質としてトルコのコンスタンチノープル（現イスタンブール）に送られ，そこでロシアのトルコ駐在公使の手に渡り（後掲のプーシキンの詩によれば，ラム酒一本の値段で買い取られ），ピョートル大帝に献上されたのだった。つまり，プーシキンは血統的に８分の１アフリカ人だったのである。

しかも，この生粋の異邦人であるアブラーム・ハンニバルがプーシキンの祖先に当たる父方のプーシキン家，母方のハンニバル家の数多い祖先の中でもっとも傑出した人物であり，プーシキン自身祖先の中でこの曽祖父に特に敬愛の情を抱いていた。1830 年かれは「私の系譜」という短い詩を書いて，13 世紀以来 600 年にわたる父方のプーシキン家の数多い祖先たちを 35 行で紹介したが，その後で《Post scriptum》（追白）として，特に母方のアブラ

ーム・ハンニバル一人を取り上げ，20行の詩を捧げた。そこで詩人は曽祖父を次のように誇っている。

私の黒い祖父ハンニバルは
ラム酒一本の値段で買い取られ，
船長の手に渡った。[4]

その船長は誉れ高い船長だ。
その御前でわが国土は動き出し，
船長は祖国の船の舵を
強く堂々と加速させた。

その船長が祖父には心安く，
安値で買われた黒い子が
成長して，勤勉，清廉，
奴隷ではなく，皇帝の心の友だった。[5]

プーシキンは20歳の若さで自叙伝の執筆をはじめたと自ら述べているが，デカブリスト事件の際にその原稿を焼却してしまった。[6]その後1834年ころにふたたび自伝を書きはじめたが，長続きしなかったようで，遺稿には祖先のことを書いた冒頭の部分しか残っていない。その中でもプーシキンは紙数の大半をアブラーム・ハンニバルの紹介に当てている。[7]

しかし，アブラーム・ハンニバルに対するプーシキンの関心の大きさを，何よりもはっきり示しているのは，かれがこの祖先を主人公とする小説『ピョートル大帝の黒人』[8]を1825年に構想し，1827年に書きはじめて，第7章の冒頭まで執筆し，一部分を生前に発表していたことである。自分の祖先の一人だけを取り上げて作品を書いた例は東西古今を通じてあまりなく，この小説はプーシキンがアブラーム・ハンニバルに向けていた関心の大きさを

証拠立てている。

2　プーシキンの中の異邦人

アフリカ系の人々は欧米諸国で長い間差別を受け，それが非人間的に苛酷な場合もまれではなく，現在も差別は根絶されていない。ロシアでは生粋のアフリカ人であるアブラーム・ハンニバルでさえ，皇帝に目をかけられて重用され，すでに混血となった後のハンニバル一族はあまり差別に苦しめられた様子はない。しかし，それは社会的レベルのことで，日常生活，人間関係，微細な心理のレベルでは，かなり深刻な問題もあった。そのことは，すぐ後で見るように，『ピョートル大帝の黒人』を通じても容易に知ることができる。

今も残っている肖像画を見ると，８分の１に薄まっていたはずのアフリカの血が，プーシキンの縮れた髪，浅黒い肌，突き出た唇にくっきりその刻印を残している。会う人はかれの家系を知らなくても，その容貌を一目見ただけで，異国の血を感じとったにちがいない。敏感な詩人自身それを察していただろう。かれは南方に追放されて異境体験をする以前に，他に類例のない独特な異境感覚を随所に見せている。たとえば象徴的なことに，プーシキン全集の冒頭に掲載されている詩「ナターリアへ」に，こんな詩句が見られる。

・・・・・・・　ナターリア！
ぼくの言うことを聞いておくれ，
ぼくはハレムの持ち主ではない，
黒人でもない，トルコ人でもない。
慇懃（いんぎん）な中国人や，
がさつなアメリカ人と
思ってもいけない。[9]

好きな女性が自分に目を向けてくれるように願って，自分が異邦人でないことを訴え，しかも，第一に自分は「黒人ではない」というのは，普通の感

覚ではあるまい。それは自分が他人に変わった印象をあたえることを意識していた人間の感覚であり，劣等感だった。プーシキンが詩人的な内向性と傷つきやすさ，ひそかな自負と野心を持っていたために，人の輪に気安く入り込めず，家族の中でも「醜いあひるの子」だったと言う人もいるが[10]，社交界でも，かれは自分を白鳥の群れの中の黒いあひるかカラスのように感じていたのかもしれない。かれは未完の民謡調の詩の断片で，おそらく曽祖父アブラーム・ハンニバルのことを頭において，こんな風に言ったこともあった。

皇帝づきの黒人が結婚しようと思い立ち，
黒人が令嬢たちの間をぶらぶら歩き，
黒人が令嬢たちをちらちら見やる。
黒人がお嬢さまを選んだのさ，
黒いカラスが白鳥を選んだように。
かれは黒人，真っ黒だ，
かの女は，いい子，真っ白だ。[11]

なんと僅か7行の詩の中に5回も「黒人」という言葉が繰り返され，それが「黒いカラス」として白鳥に対比されている。この詩は厳しい風刺ではなく，軽い戯れ歌として受け取るべきなのかもしれないが，それにしても，あまり類例のない作品である。

実際，曽祖父と美しいギリシャ系令嬢との最初の結婚は不幸に終わった。プーシキン自身の言葉によると，妻が産んだ女の子が白人だったので，アブラームは激怒し，かの女を離別して，修道院に追いやった。[12] 研究者たちは資料を調べて，ハンニバルの最初の妻には子供がなかったと推測しているが[13]，このようなプライベートな問題の場合，正規の資料より，家庭内の言い伝えの方がむしろ正しいかもしれない。いずれにせよ，常に抑圧を感じているアフリカ系の人の苦悩が『ピョートル大帝の黒人』の中心的な問題の一つだった。この小説は 1820 年代後半に書かれたものだが，プーシキンがお

そらくそれ以前から絶えず感じていた「異邦人体験」を裏書するもっとも確実な拠り所でもある。この作品の内容全体はよく知られているので，ここではその粗筋を述べるのではなく，特に「異邦人体験」にかかわる個所を拾って見ることにしよう。

『ピョートル大帝の黒人』の主人公はプーシキンの曽祖父アブラーム・ハンニバルを原型にしたと考えられるイブラヒム（ロシア語の発音では，イブラギム）である。[14] かれは外国の事情を学ぶために，ピョートル大帝によってロシアからパリに送られた若者の一人で，パリの軍の学校で勉強しながら，上流の社交界に出入りしていた。その教養，知性，それにエキゾチックな容貌は上流婦人たちの注目を引き，かれは先を争って招待されるという人気者だった。しかし，賢明なイブラヒム自身は「愛し愛されるようには，自然が自分を造ってくれてはいない」と思い，美しい女性たちが「通り一遍の好奇心以上の，心をくすぐるような感情をこめて自分を見てくれても，先入観にとらわれたイブラヒムはいっさい目をくれないか，それをただ女の媚態（コケットリー）に過ぎないと見ていた」。ところが，そのイブラヒムもついに社交界で評判の高いD伯爵夫人の魅力のとりこになり，はじめは躊躇していた夫人もかれの情熱に負けてしまう。

二人が親しい関係になったのを察すると，社交界の態度はたちまち硬化した。女性たちは「D 夫人の選択にあきれ」，まもなく「裏の意味を含んだ男たちの冗談や，棘のある女性たちの言葉が二人の耳にまでとどくようになった」。

やがてD伯爵夫人は娘を出産する。それはあらかじめ危惧していた通り肌の黒い子だった。それに備えて準備していた手筈にしたがって，別の白い赤ん坊が運び込まれ，黒い子とすり換えられて，夫D伯爵の目をうまくごまかすことができた。

ピョートル大帝から何度も帰国の催促を受けていたイブラヒムは，いろい

ろな口実をかまえてパリに留まっていた。ペテルブルグよりパリの生活のほうが快適だったし，それにD夫人との絆(きずな)があったからだった。しかし，夫人の出産後，イブラヒムは二人の関係が不幸な結末に近づいているのを察知してロシアに帰り，待ちかねていたピョートル大帝に歓迎されて，側近の一人に加えられる。

その後もイブラヒムはD夫人への想いを断ち切れず，夫人の悲しみを思いやっていた。しかし，パリから戻った友人から，D夫人がさっそく別の愛人をつくって人生を楽しんでいることを聞き，自分が結局は情事グルメのD夫人の慰み者だったことを思い知る。

ピョートル大帝はこのイブラヒムを結婚させようと考え，名門公爵ルジェフスキーの令嬢で，17歳のかわいいダンスの名手ナターリアに白羽の矢を立てる。ピョートルは自らルジェフスキー家に乗り込み，専制君主の権力で，父公爵にナターリアをイブラヒムに嫁がせるように「命令する」。いかにもピョートルらしい強引さだが，自分の亡き後，孤独な黒人がロシア社会で生き抜くのは難しいだろうという，深い読みもあったようだ。ピョートルはイブラヒムにこう言ったのである。

「いいか，イブラヒム，お前は孤独だ，親類もなければ，一族もいない，誰にとってもよそ者だ。きょうおれが死んでみろ，あしたお前はどうなる，かわいそうな黒んぼ？　まだ時間があるうちに，お前は身を固めておかなければならん。新しい係累の中に支えを見つけて，ロシアの大貴族と結びつくんだ」

大帝からナターリアをイブラヒムと結婚させるように言われたとき，親族たちはショックというより，恐怖を感じた。それをプーシキンは生々しく伝えている。もちろんその叙述は文学的創造だが，表面的な愛想のよさの下に隠されていた，アフリカ人に対するロシア人の本音は，おそらくプーシキンが書いているようなものだったのだろう。

若くして死んだナターリアの母は名門ルイコフ家の出だったが，かわいい孫娘が「黒人」の嫁にやられることを知った祖母のルイコフ公爵夫人は「あっと叫んで，両手をパチリと打ち鳴らし」，祖父のルイコフ公爵も驚き呆れて「黒人のイブラヒムに！」とさけぶ。そして，公爵夫人は夫に「ね，あなた，自分の血を分けた子を死ぬほどの目に合わせてはいけないわ。かわいいナターシャを黒い悪魔の爪に渡してはいけないのよ」と言う。それに答えて，祖父の老公爵はさけぶ。「なんということだ！　ナターシャを，わしの孫を，金で買われた黒んぼにやるとは！」

この話を聞いたナターリア自身もひどいショックを受ける。かの女は気を失って倒れ，おまけに嫁入り道具の入った箱に頭をぶっつけて，ベッドに運ばれた挙句，高熱を出して寝ついてしまう。その時うわ言のなかで呼んだ名から，ナターリアにはもう好きな男がいたことがわかる。体が回復した後も，かの女は「嫌らしい結婚が成立する前に死ぬことがただ一つの望みだ」と思うほどだった。

一方，イブラヒム自身も皇帝からこの話を聞いて不安に襲われ，こう答える。「・・・結婚ということを考えますと，若い娘とその親族たちが承知するでしょうか。私の顔かたちが・・」

これに対してピョートルは「お前の顔かたち！　くだらんことを言うな！」と一喝して，相手にしなかったが，皇帝と別れた後，イブラヒムは結婚しても「妻から愛を求めることはするまい。妻が貞節であれば満足しよう」とひそかに自分に誓うのだった。

繰り返して言えば，これはプーシキンの文学的創作である。しかし，プーシキンにとって，百年前のピョートル時代のロシアは，ある程度実感できるほどの昔だっただろう。しかも，この過去の叙述には，現時点のかれ自身の「異邦人体験」が結びついていたと考えられる。この感覚は劣等感である反面，優越感でもあり，複合的感覚（コンプレックス）になっていた。

3　プーシキンの中の「南」と詩情

その優越感の第一は，アブラームをはじめ黒い肌の祖先こそが，白人の誰にも負けない優秀な人間で，プーシキンがそれを誇りにしていたことだった。そう考えてよい根拠はすでに示しておいた。もう一つの，そして，もう少し複雑な優越感は，自分の人並みはずれた激しい感情に対するプーシキンの思いだった。かれは幼い時からひどく感情的で，それはしばしば常軌を逸して他人の迷惑になるほどだったらしい。たびたび引用されて，よく知られているものだが，貴族学校時代の友人たちは次のようにプーシキンを見ていた。

学校の寮でプーシキンと部屋が隣り合わせだったＩ・プーシチンは次のように言う。「プーシキンは最初からたいていの者より苛立ちやすく，そのためにみんなから好感をもたれなかった。それはエキセントリックな人間が人の間で受ける運命なのだ。・・・・かれには〈如才のなさ〉と呼ばれるもの，つまり，まったく遠慮のない態度では，日々の生活の不愉快な衝突から身を守ることが難しいか，ほとんど不可能な共同生活の中で無くてはならない宝が，欠けていたことだった」そして，プーシチンは自分がプーシキンと親友になれたのは，欠点も含めてかれを好きになることができたからだ，と回想している。[15]

プーシチンと違い，プーシキンの欠点を好きになれなかったＭ・コルフはもっと手厳しい。「異常なまでに興奮しやすく，歯止めのきかない（母方の血筋で）アフリカ的な激しい感情をもっており，いつも上の空で，いつも詩的な夢想にふけっていて，子供のころから誉められ，どこのサークルにもいるおべっか使いに甘やかされていたので，プーシキンは学校時代も，その後上流社会でも，その態度にはなに一つ魅力的なものがなかった[16]」コルフはプーシキンの慎みのない感情的な言動を嫌っていたばかりでなく，それを先祖譲りの「アフリカ的なもの」として軽蔑していたのである。

しかし，プーシキン自身が感情的な自分の性質を恥じたことはなかった。逆に，自分が自由な感情を持っていることを，生来の気質だから変えようがないと考えていたばかりでなく，それを不道徳なこと，人間として好ましくないこととは考えず，むしろ，当然のことと考え，ひそかに誇りを抱いていた。そして，感情の抑圧を嫌い，感情的に萎縮した人間を軽蔑していた。そのようなプーシキンの気持ちを表している例は枚挙にいとまがない。いくらか誇張すれば，かれの全創作がそうだったとさえ言える。

プーシキンは母校である貴族学校をかれなりに愛していたが，その規律に縛られた生活はかれには重苦しいもので，一度ならず貴族学校を修道院に，そこで学ぶ自分を修道僧になぞらえていた。この小論の5ページに掲げた詩「ナターリアへ」の最後でかれはこう告白している。

知っておくれ，ナターリア！――ぼくは・・・修道僧！

大全集で2番目，つまり，「ナターリア」の次に掲載されている詩は「修道僧」と題されている。[17] 未完で，作者の生前には発表されなかったこの物語詩の 10 ページほどの断片が，ほとんど注目されないのはやむを得ない。しかし，この作品は道徳と情熱，それと結びついた新しい詩の傾向と詩人の使命についてのプーシキンの基本的な考えをはっきり示している。この詩はノヴゴロドの聖ヨアンの伝記を基にしたものと言われているが，読者には必ずしもそのような解説は必要ではない。徳の高い修道僧（作品ではモスクワ近郊のパンクラーチー）が一枚のスカートの幻影に振り回される皮肉で，しかも，13 歳の少年にしては鋭く深い意味を含んだ詩句を読むだけで十分である。それを修道院（貴族学校）の壁の中で苦しむ詩人自身の戯画と受け取っても構わない。

そうすれば，このささやかな詩の中に，その後一生変わることのなかったプーシキンの自分の本質についてや，人間性，詩と詩人の使命，それを身に引き受けようとする自分の運命についての考えと態度が，はっきり読み取れ

る。そして，自分の性質，自分の詩人としての活動が非難攻撃の的になり，成功も富も名声も約束してくれないことを，かれが詩人として出発する時点で，すでによく認識していたこともわかる。にもかかわらず，その苦難に向かうことをプーシキンが決意したのは，これから詩人が創造すべき世界について，かれが明確なイメージを持っており，それに自信と自負を抱いていたからこそであろう。また，それに加えて，自分の血肉の中に，今の言葉でいえばＤＮＡの中に，自分の道を決定するものがあり，それを変えることはできないし，変えてはならないことを知っていたからでもあろう。

その動かしがたいものを，かれはハンニバル家の血筋に由来するものと感じていたようだ。『ピョートル大帝の黒人』の中で，プーシキンは曽祖父アブラーム・ハンニバルを原型とする主人公イブラヒムが「その（若い）年齢と血統の〔下線は藤沼〕熱情をこめて」[18] 世間の旋風に身を投じたことを書いている。プーシキンは自分の情熱も，自分の奥底から湧き起こる，抑え難い「南の呼び声」と感じていた。1820 年 4 月半ば，すでに南方追放が決定的になったとき，プーシキンは友人Ｐ・ヴャーゼムスキーに手紙でこう書き送っている。「ペテルブルグは詩人には息苦しい。ぼくは異国の辺境に憧れている。ひょっとすると，南国の空気がぼくの魂をよみがえらせてくれるかもしれない」[19]

こうした想いは，プーシキンが初めて直（じか）に「南国」カフカースと対面し，ロシア人にとって「南」のシンボルである海を見たとき，生々しい興奮にみちた詩句となってほとばしる。

昼の太陽は消えた。
青い海に夕べの靄（もや）がおりる。
はためけ，はためけ，風に逆らわぬ帆よ。
波立て，私の足元で，暗い海原よ。
私は見る，はるかな岸を，

南の地の謎めく国を。
胸ときめかせ，憧れて私はそこへひた走る。
　思い出に浸されながら・・・
そして感じる，目にふたたび涙が生まれるのを。
　心はたぎり，しびれる。
いつか見た夢が私のまわりを飛ぶ。
私は思い出す，昔の狂おしい恋を，
苦しんだすべてのこと，心懐かしいすべてのこと，
願いと希望の胸うずく幻滅を。
　はためけ，はためけ，風に逆らわぬ帆よ。
波立て，私の足元で，暗い海原よ。[20]

そして，この詩句は4年後，去るにあたってカフカースへ捧げた別れの詩「海へ」と一対をなしている。

さらば，自由な自然よ！
別れの際(きわ)に私の前で
お前は青い波をうねらせ
誇り高い美しさを輝かせる。
　・・・・・
さらば，海よ！　私は忘れない
お前の強くあでやかな美しさを
そして，永く永く聞くのだ
夜の一刻(ひとときの)のお前の波の唸りを

森と林へ，無言の荒野へ
お前に心満たされて，私は持ち帰る
お前の切り立つ岸壁を，お前の入り江を，

そして光と，影と，波の語る声を。[21]

出会いと別れのときに，「南」への深い想いをうたったこの二つの詩の間に，4 年の歳月があった。そして，それは『カフカースの捕虜』，『バフチサライの噴水』，『ジプシー』，さらには『エヴゲニー・オネーギン』までも生み出した豊穣な 4 年間だった。『ルスランとリュドミーラ』を書いて，ちょうど本格的な詩人として立ったプーシキンが，異境でもあり，秘かな故郷でもある「南の国」に対面したとき，その詩情は爆発的に高まり，豊かになり，充実したのである。

4　プーシキンと国民詩人

プーシキンがこの上もなくロシア的な詩人だったこと，ロシアをこよなく愛し，表現した詩人だったことは，ロシア人ばかりか，外国人であるわれわれまでも，教科書からはじまって，何度も頭に叩き込まれ，いささか食傷気味ではある。しかし，プーシキンがもっともロシア的な詩人であることは紛れもない事実で，疑いようがない。今さら繰り返すまでもないことだが，プーシキンの最初の大作で，20 歳の若者をロシアの代表的詩人に押し上げた『ルスランとリュドミーラ』は，ロシアの源泉であるファークロアの世界を取り上げたものだった。その冒頭を暗記していないロシア人は今でもいない。

入り江のほとりには緑の楢の木。
その楢の木には黄金の鎖。
昼も夜も物知り猫が
絶えずその鎖を伝って歩きまわる。
右に行っては—歌を歌い，
左に行っては—おとぎ話を語る。

そして

そこにはロシアの息吹がある・・・古きロシアの匂いがする！[22]

のである。

こうした昔ながらのロシアの息吹をプーシキンに伝えたのが，婆やのアリーナだったことも，繰り返し語られているし，プーシキン自身「夢」と呼ばれる詩の中でこう回想している。

私は自分のおしゃべりが自分でも嬉しくないが，
子供のころを思い出すのは好きだ。
ああ！　語らずにいられようか，私の婆やのことや，
秘密めいた夜のすばらしさを，
ナイトキャップをかぶり，古めかしい衣装を着て，
婆やがお祈りでもろもろの霊を遠ざけ，
念入りに私に十字を切り
声をひそめて私に死人のこと，
王子ボヴァのこと語りはじめる夜を・・・[23]

アリーナとプーシキンの心の交流は，かれが大人になってからもつづいた。1824年，カフカースから帰国させられ，今度は自分の領地ミハイロフスコエ村に蟄居を命じられたとき，かれは多くの時をアリーナと差し向かいで過ごした。アリーナに呼びかけた「冬の夜」の次の詩句も，忘れる人はいるまい。

飲もうじゃやないか，わびしい私の
青春のやさしい友よ，
飲もう，憂さばらしに。ジョッキはどこだい？
少しは心が晴れるだろうよ。
歌っておくれ，四十雀がひっそり
海のかなたで生きてた歌を。
歌っておくれ，乙女がひとり，
朝早く水汲みに行った歌を。[24]

プーシキンはペテルブルグが息苦しいと，しばしば嘆いていた。それでも

『青銅の騎士』には次のような詩句があり，それを暗記していないロシア人はやはりほとんどいないだろう。

お前が好きだ，ピョートルに造られたものよ，
お前のきりりとした，整った姿が，
ネヴァ川の堂々とした流れが，
その御影石の岸辺が。[25]

それ以上に，プーシキンはロシアの田園が好きだった。たとえば，かれをカフカースへ追いやる原因にもなった詩「村」の中で，かれはこううたっている。

ぼくはお前のものだ――好きなのだ，この暗い
涼しくて，花咲く園が，
香り高い草の山をそこかしこに積み上げ，
光る小川が潅木の中を流れるこの草場が。[26]

このように，プーシキンは心底からロシアの詩人だった。それを証拠立てるために，もうこれ以上，ベリンスキー，ゴーゴリ，トゥルゲーネフ，ドストエフスキーなどの言葉を引用する必要もあるまい。しかし，プーシキンが真のロシアの詩人だったことと，かれが生まれつき異邦人を内部にもっていたことや，異境に心惹かれていたことはまったく矛盾しないばかりでなく，まさにそのことによって，かれがもっともロシア的な人間だったことが証拠立てられる。前述したとおり，ここでは場違いなので深入りしないが，他者の問題は 19 世紀ロシア文化の大きな問題の一つであり，プーシキンはその問題に深く踏み込み，みごとな結果を生み出した人だった。その複合性こそが「ロシア的」ということの真の意味なのである。

1835 年，プーシキンは「記念碑」という短い詩を書いた。18 世紀以来，同じ題名の詩を書いた詩人は多い。それは自分の創作のいわばマニフェストを，自分に捧げる碑の銘のような形でうたったものである。その中でもプー

シキンの作品は目を引く。

私の評判は宏大なロシア全土に行き渡り，
その中に住むすべての民が私の名を口にする。
誇り高いスラブの末裔も，匈奴[フィン]の人も，今は未開な
　　ツングースも，草原の友カルムイクも。

このように，プーシキン自身，自分がロシアの詩人であると同時に，万人の詩人であることをはっきり認識していた。そして，かれは自分の作品の普遍性を確信して，こう付け加える。

そして私は永く人々に愛されるだろう，
それは私がよい心根を詩の竪琴で掻き立てたからだ，
それは私がこのすさんだ時代に自由と
倒れたものへの慈悲を誉め讃えたからだ。[27]

プーシキンは「人々に愛されるだろう」と言い放っているが，その「人々」という単語のもとのロシア語は「ナロード」である。それにふさわしい訳語は，この場合，国民でも，ネーションでも，人民でもない。もっとも漠然として広い意味の「人々」でなければなるまい。「愛と慈悲」に国境はないはずである。

偏狭なナショナリズムの立場から，プーシキンを「ロシアの偉大な詩人」，「ロシアの国民詩人」と持ち上げ，「ロシア語で読まなければ，プーシキンを本当に理解することはできない」とまで言った（今も言っている）愛国者たちは，実は，豊かで多面的なプーシキンを切り詰め，矮小化しているのである。

注

1．藤沼　貴「ロシアの作家とチェチェン――A. S. グリボエードフの場合――」。創価大学外国語学科紀要，第9号，1999，P. 1―21

「ロシアの作家とチェチェン――A. A.マルリンスキー（ベストゥージェフ）の生活――」同上紀要，第11号，2001，P. 1―19

「ロシアの作家とチェチェン――A. A.マルリンスキーの作品（デカブリスト蜂起以前）――」同上紀要，第13号，2003，P. 1―21

「ロシアの作家とチェチェン――A. A.マルリンスキーの作品（デカブリスト蜂起以後）――」同上紀要，第15号，2005，P. 25―38

2．*Гамзанов Г. Г.* А. С. Пушкин и Кавказ; Наблюдения и суждения// Пушкин и мир Востока. С.144――156. М., 1999

Белинский В. Г. Полн. собр. Соч. В 13 т. М., 1955. Т.Ⅶ С.732, С.733

3．ここで「船長」はピョートル大帝のこと。

4．Полн. собр. соч. В 16 т. М., 1977（以下，「大全集」と表記し，巻数をローマ数字で前に，ページ数を算用数字で後に書く）

5．大全集。Ⅲ，263

6．大全集。XⅡ，310

7．大全集。XⅡ，311――313

8．大全集。Ⅷ，3――33

9．大全集。Ⅰ，5―8

なお，「黒人」は現在では差別語で，公表される文章の中で使用するのは不適切である。しかし，プーシキンはこの語（原語は「アラープ」）を差別意識なしに使っていた。本論文でもこの語をプーシキンが使ったものとして引用しているに過ぎない。

10．岩間　徹『プーシキン。詩人と革命家の間』。1963，誠文堂，P.14

11．大全集。Ⅱ，338

12．大全集。XⅡ，313

13．同上

14．イブラヒムというのは，ピョートルがアブラーム・ハンニバルをロシア正教に改宗させたときに，つけてやった名前と同じである。

15．А. С. Пушкин в воспоминаниях современников. В 2 т. Т.1, С.82. М., 1974

16. Там же. С.119
17. 大全集。Ⅰ，9－20
18. 大全集。Ⅷ,
19. 大全集。XⅢ，15
20. 大全集。Ⅱ，146－147
21. 大全集。Ⅱ，331－333
22. 大全集。Ⅳ，5－6
23. 大全集。Ⅰ，189
24. 大全集。Ⅱ，439
25. 大全集。Ⅴ，136
26. 大全集。Ⅱ，89
27. 大全集。Ⅲ，424